



自然を語る会

2017年6月17日（土） 10：30～12：30

於：日能研西日暮里校 2F 日本エコツーリズム会議室

参加者：12名

担当：舟生真澄さん

『レイチェル・カーソン』 ポール・ブルックス著 上遠恵子訳

第14章 「空—子どもの世界と夢」

『レイチェル・カーソン』第14章は、「海辺」が出版されてから「沈黙の春」の随筆にとりかかるまでの期間（1956年から1957年）におけるカーソンの活動内容について綴られた章である。既にベストセラー作家となっていたカーソンの元には出版社から多くの依頼（企画）があり、その中からカーソンはまず2つの短編を執筆した。1つは雲を主題とするテレビ番組「空についてのことども」（原題：Something about the sky / 1956年）のシナリオ。海の伝記作家カーソンが空や雲に関する短編も執筆していたとは意外であったが、実はカーソンは海と同様に雲や大気に関わる諸現象にも魅せられて「われらをめぐる空気」という本を書こうと真面目に考えた時期もあったというエピソードも本章で紹介されており、カーソンの自然界に対する興味・感性の広さにあらためて感銘を受けた。本章で紹介されている内容は一部だけであるが「海の3部作」と同様に詩情豊かで美しい作品であることがうかがえた。もう1つは雑誌「ウーマンズ・ホーム・コンパニオン」に掲載された「あなたの子どもに不思議さへの眼をみはらせよう」（原題：Help Your Child To Wonder / 1956年）。これは後に出版されることになるカーソンの遺作「センス・オブ・ワンダー」の原稿である。その他「われらをめぐる海」の少年少女版の制作、1958年に「ホリデー」誌に掲載された「たえず変貌するわれらの浜辺」の執筆など、様々な活動を行っていたことがわかった。本章ではこれらの作品の他に、多くの友人へ宛てた数々の手紙やエピソード、自然保護に対するカーソンの夢などが紹介されている。カーソンが抱いていたメイン州沿岸の自然保護計画の夢は生存中に実現することはできなかったが、カーソンの死後、米国内務省によって彼女を記念してその場所は野生保護区に指定された（「レイチェルカーソン国立野生保護区」として1966年に設立されました）。

本日の担当者は当協会の”星空のナビゲーター”こと舟生さん。本章に記載されている数々の出来事を簡潔に纏めた資料のほか、図鑑や星座表、スライドなど様々な素材を用いて、本章に登場する地上から見える空や雲や月だけでなく、地球から何万光年も離れた星座や星雲や銀河系に至るまで、自然界の不思議さをわかり易く解説して下さり、参加者の皆様と輪読しながらセンス・オブ・ワンダーの旅を楽しむと共にディスカッションも大いに盛り上がりました。また私達を取り巻く宇宙や星空はたくさんのセンス・オブ・ワンダーで満ち溢れていることも教えていただきました。これからの星座の見どころは夏の大三角形。西の空にひとときわ輝いて見えるのは木星。晴れた日には毎晩夜空を見上げたくなってきました。

(文責：柳澤)